

昔、永六輔が文や詩を書き始めた時、師宮本常一から「頭の中や部屋へと籠ってものを書くな。自分の足で見て歩き、自分の耳で人の話を聞いて書け！」と教えられた、私もこのFAX通信文を書く時は必ず現地へ行って資料を集めて書くようにしております。

お陰様で凡そ9年間、220号を超えました。街中や会合でいつも声を掛け励まして下さった方が多かったからであります。

感謝を申し上げます。

今回の三陸海岸の視察は、現場を多くつぶさに見ようと言う気持ちが先行して、結局は駆け足となってしまいましたが、いくつか痛感したことをまとめてみました。

- ①潰滅した部落、村々の入り口には地元消防団の赤い消防車が必ず路上に待機しており、誰もいなくなった村々の安全警備をしておりました。大津波発生時には消防団員は水門を閉鎖し村人の救出に大活躍して300名近い消防団員が犠牲になられたと聞きました。地元消防団の命を掛けた働きは高く評価されると共に、今後、私たちの町でも対岸の火事とすることなく、良き教訓として生かした地元消防団への十分な配慮が必要とであります。
- ②津波にはいくつもの種類があって、チリ津波は大きかったけれど、間合いがあったので逃げ遅れた魚を捕まえたり、家財を取りに行き、結果として油断した二次津波が起きた時の犠牲者が多かったと言われます。今回の津波は間髪を入れない大津波、チリ津波の経験が生かされたのは、いち早く逃げて現場へ戻らなかった事でした。
- ③7万本の松原がたった一本だけ残っていますが、海岸だけでなく海岸沿いの幹線道路にも並木があったら・・・しかも他の海岸の残った松も皆細い背高ノッポの松ですので、高さ5メートルくらいでカットし、幹太の根の張った松並木の方が効果があるのではと思いました。
- ④軍用道路の様な幹線道路が廢墟の中を大動脈のように走り、その周辺にガレキの山がいくつも見られますが、数十兆円組み込まれた復興予算は何処で眠っているのかと思える程、復旧復興は全く進んでいない状況と感じました。政府はボランティア、NPOの奉仕団体に力を入れておりますが、国、行政が行うべき復旧に決断力、スピード、あるいは地方との人脈がないのでは？もう厳しい冬がすぐそこまで来ているのに・・・と憤りを感じて帰りました。
- ⑤現に市民たちは災害危険区域の中へ自宅や店の再建を始めております。決断力あるリーダーだったら、この地盤沈下したガレキの町や村を多少の反対を押し切っても埋立再分配してやればよいのに。何を待っているのだろうか。市民の多くは、必ずこの危険だと言われた古巣へと帰ってくるでしょうから・・・
- ⑥大量の汚染土は早く大堤防を再構築して深く内蔵させればよいと、現地の政府関係者に提言しましたら『良い案です!』と肯定してくれましたが・・・幹線道路が大堤防に沿って走っているところが被害をまぬかれておりました。
- ⑦北の仮設住宅は、雪に閉じ込められてアルコール依存症、うつ病、自死への危険が始まっております。君津へ来られている方達への配慮も欠かせません。
- ⑧2階建てのビルの上に大型バスが乗っております。津波のエネルギーは人力では想像できないものです。津波はいち早く逃げるのが最善策かもしれません。